

## 太子善秀寺の宗教活動について

### 一 はじめに

NHKの総合テレビで「ファミリーヒストリー」なる番組が、平成二〇年から放映され大そう人気を博している。筆者もその視聴者の一人で、両親が年老いて来入ると無性に自分のルーツを知りたくなった。

母方の曾祖父が大阪府南河内郡太子町太子にあった太子善秀寺の僧侶をしていたことは、母方の親戚が集まると、そのことがよく話題にのぼったが、誰一人として詳しいことを知る者はいなかった。還暦を前にして、筆者の虫が騒ぎだした。個人的なルーツ探しに端を発した調査ではあったが、進展するに従い予期しない今まで知られていなかった太子善秀寺の興味深い宗教活動の一端が明らかになった。決して、歴史学の専門誌に公表するほどの成果ではないが、この史実が今後の聖徳太子信仰の広がりや浄土真宗の布教、叡福寺史に多少なりとも裨益するところがあるのではないかと考えた次第である。

結論を先に言えば、太子善秀寺は江戸から明治にかけて叡福寺と深い関わりをもち、大破した聖徳太子御廟殿堂を再建するために、『大乗木由來』などの木版の刷物を開版し、文書布教を通して広く浄財を集めていた。また多数の釈名を記した台帳の分析から、善秀寺の僧侶が河内・摂津・山城・

竹谷俊夫

近江・紀伊・和泉・大和の諸国を回りながら勧進していたこともわかったのである。

なお、本稿を草するにあたり、貴重な史料の閲覧を許された大西昌弘・美苗ご夫妻、奈良県立図書情報館をはじめ、有益なご教示を賜った東山善秀寺住職の山内浩太郎氏に感謝したい。また、くずし字に無知蒙昧な筆者を援助して下さった大阪大谷大学専任講師の馬部隆弘先生と大阪府立大学名誉教授の山中浩之先生に深甚なる謝意を表する。

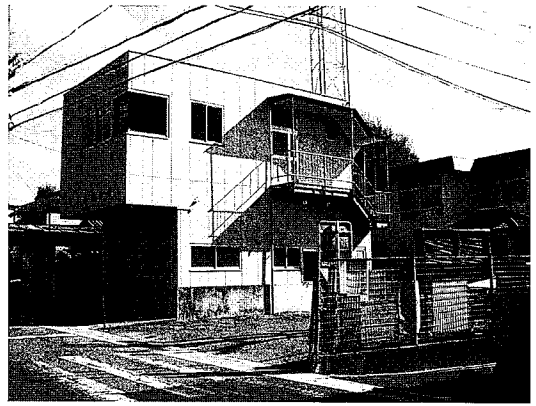
### 二 善秀寺の沿革

創建についての明確な史料は確認されていないが、『太子町誌(一)』(一九六八)には、次のような簡単な記述がある。

#### 「善秀寺」

太子町字内之町にあり。真宗西本願寺の末寺で、阿弥陀仏を本尊とする。創立の年月は不詳で、寛文二年二月より寺号を公称した。

境内は一七五坪を有し、本堂庫裡、山門を有す。現在は太子青年会館を建てた所であらう。」



第1図 太子善秀寺址

文中には出典は示されていないが、寛文二年（一六六二）二月より寺号を公称したと具体的に記述されているのは、何らかの史料に基づいたものである。西本願寺への登記は、寛保二年（一七四二）一月で、河内国南河内郡磯長村大字太子一七三三に所在したとする。

明治以降の善秀寺の動向を知る手掛かりとして寺院明細録が

参考になる。『真宗両本願寺末派寺院明細録 附録両山書式文例』<sup>〔一八九二〕</sup>には、善秀寺住職として曾祖父にあたる大西了觀の名が見え、大和国高市郡妙法寺村にある徳應寺の住職<sup>〔三〕</sup>も兼ねていたことがわかる。『記録所編纂 本派本願寺寺院名簿 全』<sup>〔四〕</sup>（一九〇八）には、善秀寺の衆徒大西義了の名が、『大阪府佛教各宗聯合寺院名簿』<sup>〔五〕</sup>（一九一三）には、善秀寺の名が見える。また、『本派本願寺寺院名簿』<sup>〔六〕</sup>（一九二二）には、善秀寺の衆徒庭谷義秀と大西憲一の名が見え、大西了觀の息子である大西了證が大和の徳應寺の衆徒であったことも確認できる。了證は太子善秀寺の復興に尽力したが、その夢はかなわなかった。

その後、地元の南河内郡東部教育会が編集した『郷土史の研究』<sup>〔七〕</sup>（一九二六）には、次のような磯長村大字太子の廢寺に関する消息が記されている。



第2図 東山善秀寺

「廢寺  
廢寺磯長村大字太子に福院寺、安尼寺、南光寺、西光寺、西廣寺、善修寺あり。」

この六ヶ寺のうち、最後の善修寺が善秀寺の誤記だとすれば、『郷土史の研究』が刊行された大正一五年（一九二六）には寺院としての実質的な機能を果たしていなかったのではないかと思われる。

大阪府公文書館にある昭和二八年（一九五三）作成の『寺院台帳』<sup>〔八〕</sup>によれば、所在地は大和府南河内郡磯長村大字太子壹千七百參拾參番地、真宗本願寺派に属し、阿弥陀如来を本尊とする。建物は木造切妻造瓦葺平屋建本堂（式拾坪）・同庫裡（拾九坪）・同物入（五坪）・同倉庫（參坪）・同事務室（式坪式合八勺）・同茶之間（參坪）・同炊事場（式坪）・同門（壹坪三合）があったことが分かる（第1図）。なお、台帳には善秀寺に関する同種の頁がもう一部あり、所在地を南河内郡石川村東山、住職を庭谷義順氏と朱書している。

善秀寺は『寺院台帳』が作成された昭和二八年（一九五三）から石川村が白木・河内・中村の各村と合併して河南町となる昭和三一年（一九五六）年九月三〇日までに南河内郡石川村東山（現河南町東山八一九番地）に移転した（第2図）と推定される。その後火災に遭い、太子善秀寺から移築した薬師堂が焼失したらしい。火災の全貌は不明であるが、住職は庭谷義

順氏から宮井一磨氏、山内浩太郎氏へと受け継がれている。

善秀寺のあった太子一七三番地は主要地方道美原太子線に面し、間口（東西）約一〇m、奥行き（南北）約四〇mの広さを有し、現在は太子消防分団と太子集会所として利用されている。集会所の前に太子町が設置した太子地区急傾斜地崩壊対策事業完成記念の標示板に「善秀寺川」の名を留めるほか、境内にあった菩提樹の古木が往時をしのばせている。

善秀寺の墓地は聖徳太子御廟（第3図）の北西方すぐのところにある。

附近一帯の墓域は応永六年（一三九九）銘を有する阿弥陀石仏<sup>①</sup>にはじまる古い墓石が立ち並び、中近世墓地としての景観をよく留めている。善秀寺墓地（第4図）は西に面し、向かって右側に東西方向に二基、左側に一基、奥側に南北方向に三基が建ち、南東隅に七基の小さな一石五輪塔が



（柱長根郡河内府飯太地在所） 聖太子太皇太后御廟  
第3図 聖徳太子御廟



第4図 太子善秀寺墓地

集められている。東西方向の二基の内、東側の墓石には、前面に「釋尼妙信」とあり、釈名の右側に「享和二年」（一八〇二）の元号銘、左面に「太子 善秀寺」とある。西側の墓石には、前面に「釋了觀」、右面に「弘化乙巳年六月十二日」、左面に「紀劬名草郡黒田邑 願立寺」とある。弘化二年は一八四五年、了觀は願立寺の出身であったことがわかる。ここに見える了觀は曾祖父の大西了觀ではない。北側の三基は立派な無縫塔で、北から釋義了、釋尼定山、釋尼妙説の順に並ぶ。明治四二年（一九〇九）五月、大西光丸氏が建立した。向かって左側の一基は大西光丸・壽衛夫妻の墓石である。南東隅の一石五輪塔については年代等不明である。

### 三 善秀寺の木版刷物三種

大西了觀が兼任職を勤めた徳應寺（橿原市南妙法寺町六の一五）の寺院明細帳を閲覧するため、奈良県立図書情報館のホームページで資料の検索をしていたところ、同館に「叡福寺修復勸進状」と題した文書があり、それが善秀寺の開版した木版の刷物であることがわかった。以下がその書誌情報である。

文書名 「叡福寺修復勸進状」・他2点

作成・受取人 河州磯長上之太子弘通所善秀寺奉讃講世話方講中

文書群 大和国葛上郡名柄村中野家文書

内容注記 木版

注記 年次注記：年次不詳

形態注記：状

マイクロ情報：無

デジタル情報：無

請求番号 50-20-75

資料ID 557002517

所在 ふるさと貴重書庫

貸出区分 禁帯出

カテゴリ 古文書

大和国葛上郡名柄村中野家文書

ほどなく閲覧許可願を提出し許可を受けてから、紙袋に入った木版の刷物を取り出してみると三点あった。仮に史料A・史料B・史料Cとする。史料Bと史料Cは密着したままひどい虫食い状態にあり一点とされていた。閲覧時には文書名に「叡福寺修復勸進状・他1点」とあったが、その旨を申し出たところ三点に訂正された。史料Cには「大乘不由来」と題名が付いているが、史料Aと史料Bには題名はない。

史料A 縦二四・七cm×横三四・六cmある。四方の空きは、天一・六cm、地二・二cm、左二・一cm、右一・六cm。本文二行に住所・寺名など四行を付す。四つ折り。

弘通所善秀寺の奉賛講話方講中が開版した刷物である。叡福寺は聖徳太子が母穴穗部間人皇女と夫人紀膳大娘とともに葬られた三骨一廟の霊地である。太子は十七条憲法をはじめ、農業・土木・建築・商業・医薬・音楽など、国の発展に大きな働きをされた方である。すべての民はその恩をよく心得るべきである。日本の釈尊、和国の周公孔子と敬われた太子を葬る御廟の殿堂門字が長い年月の間に大破している。どうか再建のための浄財を乞うとある。

史料B 縦二四・一cm×横三一・三cmある。四方の空きは、天一・六cm、地一・四cm、左〇・三cm、右一・〇cm。本文二行、行間はやや広い。四つ折り。

弘通所が開版した刷物と思われる。弘通所とは善秀寺のことであろう。民が不自由なく便利に生活できるのは、交易売買を通じて必要なモノを手することができるからである。このすぐれた制度は誰がお始めになったのか。聖徳太子が民のことを思い市を立てられたのである。その恩を忘れてはならない。太子に高恩報尽を願う民は、年中両度の彼岸に叡福寺のご廟窟へ参拝し、弘通所にて太子のご苦勞とその元はじまりを思案しようとする。

史料C 縦二四・〇cm×横三一・〇cmある。四方の空きは、天一・五cm、地一・七cm、左〇・八cm、右一・六cm。一行目に大きめの字で題名を付す。本文二行。四つ折り。

弘通所善秀寺が開版した刷物で、『大乘不由来』という題が付く。聖徳太子が母穴穗部間人皇女を葬られる時、御輿の轅をとって靈廟の傍らに挿された。御教えが国中に弘まるならば、根芽が生じ枝葉が栄えるだろうと。故に大乘木と名付けられた。太子御滅後、成木したが天正年間の兵火によって、御廟諸堂が消失し、大乘木も半ば枯れた。大乘木の切れ端を求める民が多く、此の霊木で念珠一千連を造り授与する。太子と御縁のある念珠を身に付け、誓願恩を信じ称名念仏すれば、三宝興隆し万民を済い、太子のご本意が適うだろうとある。

史料A・B・Cは、薄い和紙に刷られているが、Aがわずかに厚く、刷紙もB・Cより一回り大きい。密着していたB・Cの刷紙はほぼ同じ大きさである。開版時期は江戸時代の後期と思われるが、AとB・Cとの間に

時期差があるのかも知れない。版木に刻まれたくずし字にも若干の相違が認められ、天池・左右の空きも異なる。Aは天地左右の空きを適切にとるのに対し、B・Cは特に左右の空きが狭く窮屈である。

史料A・史料B・史料Cの翻刻文は以下に示す通りである。

# 史料A (第8図)

河内国石川郡磯長山穀福寺ハ、聖徳皇あらかじめ窠夢の地をさだめ置給ふ霊地なり、推古帝廿九年、御母間人皇后を此地に葬りたまひ、其後御遺命を奉じて后諸ともに合感なし、三骨一廟におさめ奉る、抑皇太子皇只仏乗におる興隆力をあらわし給ふのミならず、濟世の御いさをし牧奉にいとまあらず、其二三を讀し奉れば、推古帝二年に神道を国々に令して祭祀に懈事なからしめ、十七条の憲法をさだめ御国斎家の典を修し、民に農の時を授け稼穡播種の道をおしえ、水旱のために池をほり堤をきづき、地のよろしきをさとし、工にハ規矩準繩をさだめ堂宇を造るの要を示し、商売にハ市を立有無交易せしめ、各其所を得たり、又医薬を教て民の疾苦をとひ、樂律を制して万年の後につたへても種菜の古調を失わす、神儒仏の三道をつらぬき、農工商売の四民に涉り治国修身の要より利用厚生之道までのこととなく、万代不易の業をたれをはじめ給ふ、此御国に生を感ずるもの出候より歴民にいたる迄誰人かその恩にもるゝものあらんや、是以仏者ハ日本の釈尊と崇め、儒士ハ和国の周公孔子と敬奉るも豈聴る所ならんや、棟宇の下に風雨寒暑をしのぎ五穀の滋養によりて命根をつなくと輩其恩をわきまへざるにおいてハ豈禽獸に異ならんや、爰に御廟殿堂門宇年歴少な

からず大破におよび、一山の結衆より再建の議談せられ此儀心を尽すいへとも、福力拙く其功遂がたし、依て十方有縁の檀衆恩惠報尽の時節なれば、歩を廟堂にこひをにづらねて希ハ至徳をむくひ

河州磯長上之太子

弘通所 善秀寺

奉讃講

世話方講中

# 史料B (第9図)

米麦ありとも柴薪なくバ煎熟ことあたはず、米麦柴薪ありとも塩糟等なくバ食をすゝむることあらんや、其外醬油等の類一切なぬものなり、然に米麦ハ田畠に生じ柴薪ハ山林におひ、塩魚ハ海より出、人若自らして米麦をり、山林に入て柴薪をおり、海に投じて塩魚等をバ、豈夫々の用をなす事を得んや、誠ニ便利なるかなや、交易充實の互にあるとなきとを代替いづれも不自由なきよふ活命する此の道にれる事なり、抑かよふのかしき道ハ誰人のはじめ給ふぞと尋るに往昔 推古天皇の御宇 聖徳皇太子深々憐れ給ひ、大和国三ひて始めて市をじて山海田畠の諸品の道をおしへ玉、夫々月々市をたて同

おひてハ上市・下市、余国にハ三日市・四日市・市などはじめ給ふ、夫其家あまたニおかかたきに付てハ、家名を付旌旗を令せ

是皆 皇太子の功なり、嗚呼今日弥増繁昌して隣家ニハ木屋有、向ひにハ塩家あり、安穩に活命するハ誰の恩徳なるや、まして

夫々交易の□□□□のハ銘々己が家業に就而別して高恩をかふむる身□□□□一日も其恩を忘るべからざるものなり、いやしくも其恩徳を□□□□設ひ捷利に交易をなすとも御罰をかふむり、損亡あること眼前たるべし、高恩報尽のおもひあらん人々はせめて年中兩度の彼岸のおりなりとも磯長山叡福寺□御廟窟へ□拝ありて、弘通所にて目□ハ御苦勞の御姿を拝ミ、耳にハ其謂を□聞ありたき事なり

# 史料C (第10図)

大乗木由来

夫河内国磯長の灵廟ニ現存せる処の大乗木とまふす、往昔用明天皇□御□□皇□□御ましますとき聖德太子御□傷限なく且孝養荷恩のため御輿の轅を取て磯長の灵廟に供奉したまへりけるに、其轅を彼廟傍にさして誓□□弘むる所の大乗の法当地に相応□□繁昌せバ根芽を生ず□□□□ひ□□れば、ふしぎなる哉御言葉のことく忽ち枝葉さかへけり、依て此木を大乗木とハ名づけ給へり、尤廿句の御文に大乘相応功德地とのたまひ、又皇太子の御正忌の法事を大乘会と称す□□ことに所似あるかな、皇太子御滅後、追々成木してその周り式丈に余れり、然る二天正年間兵火のために御廟諸堂焼失の砌り大ニ損じ半バ枯ぬ、追々壊損いたし此頃其内少ししたはれ□□□□に類なき大切の灵木ゆへ、弘通所善秀□□お□□其切はしを乞求むる人少からず、然るに利益の広からん□□思へども灵木限り有て加増の述□□□、依て此木をもつて念珠を造り授け

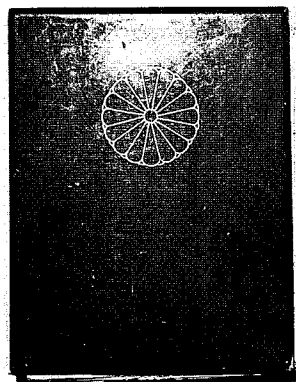
たまへとこひ□□□□の□□つ□□ければ、こたび念珠一千連を造らしめて随喜□□に授与せしむ、されバ一千二百有余年の末に生れ護持養□□の縁あり□

皇太子自ら□□給ひし灵木の念珠を親く我手にふれん事、親縁進縁の謂れを思ひしられ弥本□□の誓願を信じて称名念仏せば上宮太子の三宝を興隆して万民を済ひ蒼生を導利して卒土安□□□しめん、御本意□□□叶ひ侍りぬべし、此等のことわりを告し□□□□に述顯□□きなり

## 四 太子善秀寺『勸進帳』(第5図)

善秀寺の墓地在叡福寺にあることは知っていたが、広い墓域のどこにあるのかは長らく不明のままであった。幼少の頃の古い記憶を頼りに何回にもわたって探し求めたところ、平成二五年一月二日になってようやく見つけ出すことができた。善秀寺墓地の概略については前述したとおりである。早速、墓地の持ち主である大西昌弘・美苗夫妻を訪ね、善秀寺の消息をお聞きしたところ、『皇太子御繪傳』二組、『聖德太子傳』第一巻から第一〇巻などの他に多数の釈名を記載した一冊の台帳が残されていることを教えて下さった。倉卒の間ではあったが台帳の一部は手持ちのデジタールカメラで撮影をさせていただき、詳細な調査は後日に期すこととした。

台帳は表と裏が漆塗りの木製の板からなり、表の上方には一六弁



第5図 太子善秀寺『勸進帳』

の菊花文が描かれている。表板は縦二七・三cm、横二一・四cm、板の厚さは〇・七cmある。裏板も表板と同じ大きさであるが、左右二つに割れている。台帳の厚さは表と裏の板を含めて五・二cmある。

体裁は折本形式で、冒頭三頁にわたって次のような内容の序文が記され、末尾に嘉永元年（一八四八）戊申年の元号が入る。

すなわち、河内磯長山叡福寺は過去七仏転法輪処にして、聖徳太子と母、妃が葬られた三骨一廟の霊場としてよく知られている。ここは浄土真宗の高祖親鸞聖人も参籠されたところである。仏の御出世なき時には仏の教法を読誦講習することに極る。浄土の三経は釈尊出世の本懐とあればこれにこしたことはない。この転法輪殿すなわち聖徳太子の花香寺としての叡福寺に春秋両度の彼岸に、三経読誦して法輪退転することがないように、また輪殿全備の助けとして永代誦経の信施多寡を問わず勸進を乞いたいと記している。

台帳に題簽はないが、序文の内容からすると、『過去帳』ではなく『勸進帳』とするのが適切かと思われる。以下、この台帳を『勸進帳』と称する。

### 『勸進帳』序文

河州磯長山は、過去七仏転法輪処にして、  
上宮皇□□三骨一廟の霊場なることは、かねて人の知りはへる処なり、別て我宗は、高祖聖人の念仏弘通し玉ふも、全く此度御参籠の折から、□吉をかふむり玉ふに由るなり、爰に去ルとし此の□□はかをせうに一の堂宇をもつて法輪転と名ける、此の

縁由を尋に、此転法輪処に而後仏三会の曉まで、法輪を転し長く退転せしめしとのかや、尚

□差□□にも御入興成し玉ふことなり、然に転法輪と申歟、御経にも説玉ふ如く仏の御出世なき時には仏の教法を讀誦講習せんに究ることかや、中に浄土の三経ハ

釈尊出世の本懐とあれば此に過るハあるへからず、依而石川四十箇寺法□□此法輪殿□春秋両度

三経読誦して法輪退転せしめんと志に仏法に此殿□結構の場には至り候へとも未タ全備を得ず候、

仰願は諸方の檀越法輪久住の志と存、輪殿全備の助をなし永代誦経の信施多寡をいと

わす法号□称記録なし下されとのやうものなり

嘉永元 戊申年

『勸進帳』の書式は、縦の野線が入った作成時期の異なる記帳済みの料紙を継ぎはぎにして再構成し、一冊の折本に仕上げたもので、表と裏の両面に釈名が記されている。したがって、頁によっては一



第6図 河内國上ノ太子御廟伽藍之繪圖  
(大阪府立近つ飛鳥博物館蔵) 註 (一四)より転載

願主との親族関係が記されている。

記帳された釈名は七一三件あり、そのうち二九三件について分析した。二九三件のうち没年が読み取れたものは一八二件で、文化五年（一八〇八）から明治四年（一八七二）にかけてである。元号ごとの釈名数は、文化三・文政二・天保二二・弘化一〇・嘉永一八・安政二二・萬延九・文久二〇・元治六・慶応七・明治六三である。

このなかには善秀寺の僧侶とその妻、妻の妹についての三件の釈名が含まれている。釋聞流法師は「実ハ越中新川郡堤谷 常行寺聞香ノ長男 年六十七才」、没年は記されていないが命日は「十一月十一日」とある。釈尼教了は「聞流ノ妻實ハ越中新川郡滑川 稗田屋七左門ノ娘也俗名ツタ 年六十七才」、没年は「萬治元年申三月廿三日」とある。しかし、没年の萬治元年は戌年であり、萬延元年申年の誤りと思われるで、釈尼教了の没年号は萬延元年が正しいことになる。釈尼妙流は「実ハ上ツタノ妹也 越中富山長柄町 嶋野ヤ太右エ門ノ妻俗名ツテ 年七十五才」、没年は「明治三年十月一日」とある。この三人の親族関係から、釋聞流法師は萬延元年ころに亡くなったと想像される。だとすれば、『河内國上ノ太子御廟伽藍之繪圖（二）』（大阪府立近つ飛鳥博物館蔵）（図6）の枠外に「改版寄附御領内善秀寺同隠居聞流坊」と記された聞流は『勸進帳』に見える僧侶と同一人物である可能性が高く、繪圖の年代を比定する根拠になると考えられる。

次に願主の住所を見ると、河内小山邑（藤井寺市）・河内西浦（羽曳野市）・河内蔵之内（羽曳野市）・河内喜志（富田林市）・京蛸薬師富小町（京都市）・諸司代地役（京都市）・京御幸町松原下ル（京都市）・大坂（大阪市）・大和國中井村（奈良県）・牧村・本渡り村（和歌山市）・岩橋村（和歌山市）・紀州国伊都郡端場村（橋本市高野口町伏原）・岸ノ上（橋本市

市岸上）・大和初瀬里（桜井市）・吹多村（吹田市）・風呂谷・□木・鳥羽村・満佐井里・藏人（吹田市）・住吉・淀（京都市）・廣瀬（大阪府三島郡島本町）・梶原村（高槻市）・高槻・郡山（茨木市）・中尾・堀池（伊丹市）・高松・クセ村（京都市）・丹波篠村・開田（長岡京市）などがあり、河内・摂津・山城・紀伊・大和の各国に及んでいる。おそらく善秀寺から竹内街道を通じて、大和街道・西国街道・伊勢街道沿いに回国し勸進していたことを示すものであろう。日帰りのできない遠方の地では訪ねた民家に宿泊を乞うこともあったであろう。

また、願主としての寺院も河内西浦覺永寺（羽曳野市西浦三の一五の九）・河内喜志明尊寺（富田林市桜井町一の一五の二〇）・岸上照光寺（橋本市岸上二九八）・常宣寺（宝塚市大成町五の七）などがあり、現在でもその所在を確認できる。

分析の対象とした二九三件以外の願主の住所としては、泉州・江州をはじめ、地元の春日村（太子町）・山田村（太子町）・伽山（太子町）・畑村（太子町）・上ノ太子村（太子町）・白木村（河南町）・山城村（河南町）・大ケ塚（河南町）・古市村（羽曳野市）・飛鳥村（羽曳野市）・新堂村（富田林市）・三日市（河内長野市）などがある。

なお、釈名のなかには僧侶が回国して勸進を行わず、叡福寺または善秀寺で行われた行事の際に記帳されたと思われるものも含まれており、更なる検討が必要である。

## 五 若干の考察

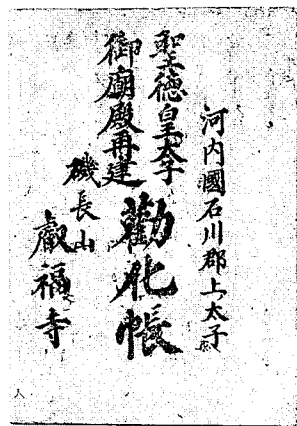
今回紹介した木版の刷物三点と『勸進帳』は、管見では初出の史料と思われる、太子善秀寺の宗教活動とその性格を知る上でまたとない貴重な史料



と言える。

『勸進帳』の中には、「梶原村同行中」（高槻市梶原）と記された箇所があり、善秀寺僧が近隣諸国を回りながら村落の家々を訪ね歩き作成したことが明らかである。その目的は『勸進帳』の序文で述べられているように、転法輪殿すなわち聖徳太子墓の花香寺としての叡福寺で春秋二度に三経誦誦して法輪が退転することなく、また輪殿の全備の助けと永代誦経の信施すなわち浄財を集めるためであったと思われる。木版の刷物は行事や回国した際に携え、釈名を記帳した家々に聖徳太子信仰と親鸞聖人の教えを説きながら配布したのであろう。同時に『皇太子御繪傳』を持ち歩き、聖徳太子の生涯を絵解きしていたとも想像される。史料A・B・Cは、大和国葛上郡名柄村（御所市名柄）の中野家に伝えられていたが、この木版の刷物三種もまた善秀寺僧の勸進によって中野家にもたらされたものであろうか。

序文末尾に嘉永元年（一八四八）戊申年とあるが、この年は叡福寺の最後の居開帳の年と一致（二）する。この年に先立つ弘化二年（一八四五）に東山村（河南町）の浅田吉右衛門が太子御廟殿再建のため金百疋を寄付したとする記録が残る（三）。太子御廟殿再建に多額の費用を要したのである（図6）。それは史料Aに「御廟殿堂門宇年暦少なからず大破におよび一山の結衆より再建の議談せられ……随意的施入頼入候」とあり、また史料Cの『大乗木由来』に見える大乗木の倒木片で



第7図 聖徳皇太子御廟殿再建勸進帳（刊記不明）

作った念珠一千連を参拝客に授けていた事実も浄財を勸進していたこと符合する。

善秀寺の布教・勸進の方法は、近世から明治にかけて隣村の葉室にあった仏眼寺の行者がオセタを背負い西国三十三ヶ所巡礼の代参をしていた宗教活動（四）と酷似する。しかし、浄土真宗西本願寺派の小さな末寺であった善秀寺が『河内國上ノ太子御廟伽藍之繪圖』（改版）や『大乗木由来』をはじめとする木版の刷物を開版していた事実は、叡福寺との密接な関係を抜きにしては考えられない。ここに善秀寺が叡福寺に隣接するという地理的関係を巧みに利用し、聖徳太子信仰を背景に親鸞聖人の教えを弘めていた姿が浮かび上がってくるのである。同時に叡福寺にとっても御廟殿再建のための浄財を入手にすることができたと考えられる。双方にとって理に適った相互依存の関係が構築されていたのであろう。

最後に『勸進帳』の分析がはなはだ不十分であったことは重々承知しており、今後とも引き続き全貌を明らかにすべく努力することをお約束して擲筆する。

### 【註】

- (一) 岩井好一ほか編『太子町誌』（太子町役場、一九六八年四月一日）、七一頁。
- (二) 菅龍貫編『真宗両本願寺末派寺院明細録 附録両山書式文例』（共益義会、一八九二年一〇月一五日）。〇三十八頁に善秀寺住職／大西了觀、〇五十九頁に徳應寺兼住職／大西了觀、〇三百〇一頁に願立寺兼住職 吉田信乗とある。なお、願立寺は現在確認できない。国立国会図書館デジタルコレクションによる。
- (三) 徳應寺の『過去牒』（昭和四五年正月写）によれば、大西了觀が兼職に着いたのは、明治二年（一八八八）旧二月二五日とある。『過去牒』の閲覧には

住職の浅木妙順氏のご配慮を得た。二〇一二年二月一日に実見した。

(四) 本願寺記録所編『記録所編纂 本派本願寺寺院名簿 全』(一九〇八年九月)。

四百五十六頁に徳應、六百四頁に大西義了、善秀、七百二頁に園田唯信、願立とある。国立国会図書館デジタルコレクションによる。

(五) 『大阪府佛教各宗聯合寺院名簿』(参業会編集部、一九一三年二月二四日)。

六六頁に善秀寺とある。国立国会図書館デジタルコレクションによる。

(六) 『本派本願寺寺院名簿』(本派本願寺枢密部、一九一二年二月一九日)。六八四頁に徳應寺兼 布施一雄・衆 大西了證、七五七〜七五八頁に善秀寺衆庭谷義秀、衆 大西憲一とある。国立国会図書館デジタルコレクションによる。

(七) 南河内郡東部教育会編『郷土史の研究』(南河内郡東部教育会、一九二六年六月一日)、一七〇頁。

(八) 大阪府公文書館の寺院台帳の閲覧は、二〇一二年八月三〇日に行った。

(九) 天岸正雄・奥村隆彦編『大阪金石志―石造美術―』(三重県郷土史料刊行会、一九七三年六月一日)。

(一〇) 奈良県立図書館、二〇一二年二月一日に閲覧調査及び写真撮影。二〇一七年二月二六日に追加調査を行った。

(一一) 上野勝己ほか『聖徳太子廟の香花寺 叡福寺縁起と境内古絵図』(平成二二年度企画展図録、太子町立竹内街道歴史資料館、二〇〇〇年九月三日)。大阪府立近つ飛鳥博物館所蔵の絵図は、図録一三頁の上段の写真。上野氏は「幕末以降の改版の可能性が高い」とする。図録掲載の絵図と同版であるが枠外に改版寄附…と刷り込まない資料が、天理大学附属天理参考館に二枚所蔵されている。一枚は枠内の絵図が全く同じもの(J3)、もう一枚は版木に刻まれた建物などの名称を一部削り取って刷られた絵図(J414)である。二〇一二年六月一八日、日本民俗室の中谷哲二氏のご配慮で確認することができた。少なくとも

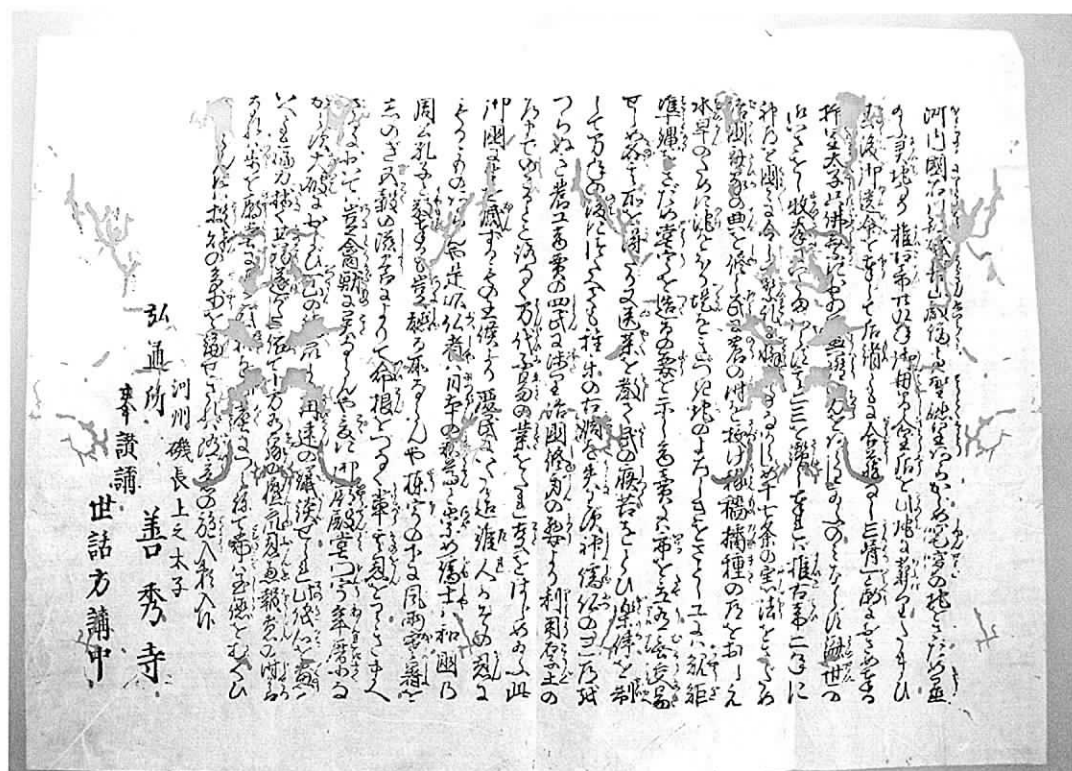
も絵図(J414)は絵図(J3)及び枠外に改版寄附…と刷り込まれた絵図よりも後出のものと言える。

これとは別に、近つ飛鳥博物館副館長の森本徹氏から、同館所蔵の叡福寺関連絵図についての資料紹介があるとのこと教示を得た。鹿野聖「叡福寺関連資料」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』一二、二〇〇九年四月二八日)である。鹿野氏は同館所蔵の改版寄附…と刷り込まれた河内國上ノ太子御廟伽藍之繪圖(資料一)の時期について、「本堂などが再建され叡福寺の伽藍整備が進んだ段階」としながらも、一七世紀の後半の可能性もあるとする。また、天理参考館所蔵絵図(J414)と同版の河内國上ノ太子御廟伽藍之繪圖(資料二)については「享保十七年(一七三二)の金堂再建以後、かなり時間が経ってから」のものと考えられている。

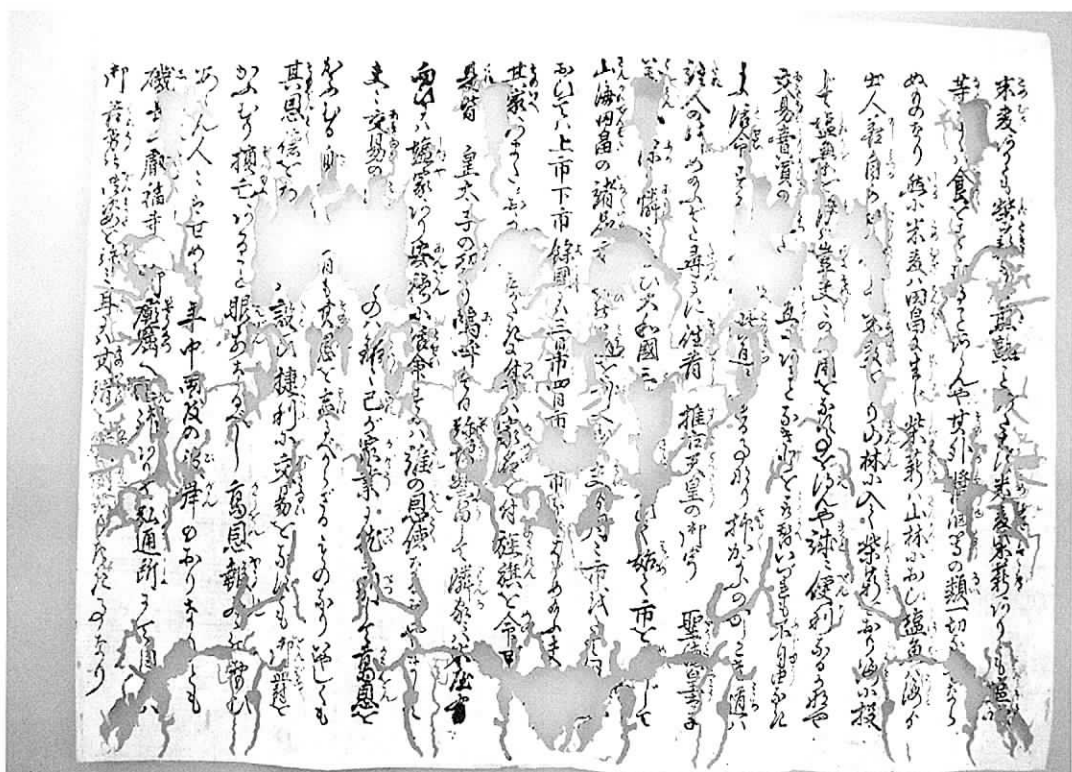
(一二) 上野勝己ほか『聖徳太子伝―太子信仰の世界―』(平成八年度企画展図録、太子町立竹内街道歴史資料館、一九九六年一〇月一日)。図録三四頁に居開帳の年を示した一覧表がある。

(一三) 野村豊『河内石川村学術調査報告書 近世村落資料』(大阪府南河内郡石川村役場石川村学術調査報告刊行会、一九五二年三月三十一日)。三八六頁に弘化二年(一八四五)に東山村の浅田吉右衛門が太子御廟殿再建のため金百疋を寄付したとする。

(一四) 仏眼寺の行者による西国三十三ヶ所巡礼の代参については、次の文献に詳しい。小嶋博巳編『西国巡礼三十三度行者の研究』(岩田書院、一九九三年一〇月一日)及び上野勝己ほか『西国巡礼と葉室組行者』(平成一〇年度企画展、太子町立竹内街道歴史資料館、一九九八年九月三日)。



第8図 善秀寺開版刷物史料A (奈良県立図書情報館蔵)



第9図 善秀寺開版刷物史料B (奈良県立図書情報館蔵)



第10図 善秀寺開版刷物史料C『大乘木由來』(奈良県立図書館情報館蔵)